

黒岩涙香、日本探偵小説の始祖になる

——涙香評価の転換点

落合教幸

はじめに

黒岩涙香は明治期に活躍したジャーナリストだが、探偵小説の分野でも知られている。「法廷の美人」をはじめ多くの探偵小説を翻案・翻訳した。また創作探偵小説「無惨」も執筆している。

現在では、日本探偵小説史の起点として扱われることの多い涙香だが、その位置づけはどのようになされていったのか。大正末の江戸川乱歩登場前後を中心にして見ていく。

涙香研究者の伊藤秀雄は、涙香の業績について『明治の探偵小説』『黒岩涙香』をはじめとする多くの著書で論じている。涙香が受けた評価については、例えば『大正の探偵小説』の「第十七章 涙香に還る」では、「涙香の影響を受けた大正期以後の作家について挙げてゐる。まず、野村胡堂の回想が引用されている。」

江戸川乱歩氏が盛んに売り出そうとしている頃、それは確か関東大震災の翌年あたりであったと思う。報知新聞の応接

間で始めて逢って、私は「面白い探偵小説を書こうとするなら黒岩涙香を研究すべきではあるまいか、今の人は涙香を忘れかけて居るが、この人の話術は古今独歩で、筋を面白く運ぶこと、人物を浮出させること、複雑な事件を書きこなしに行く技倆に至っては、全く比類もないものである」と話したことがあった。

江戸川氏もその頃既に涙香研究に着手していた相で、その後から文壇の一隅に、涙香研究と涙香の著書蒐集が盛んになり、木村毅氏、柳田泉氏、横溝正史氏などそのうちでも有名なものであったが、一方若い探偵作家の仲間にも、涙香熱が高まり、一時「涙香の書くような悪人が書けたら」ということが、探偵作家の一つの通り言葉になった時代さえあった位である。（涙香に還れ『巖窟王上巻』愛翠書房 昭和二十三年）

江戸川乱歩が『新青年』の次に書くようになった雑誌は、報知新聞社から出ていた『写真報知』であった。大正十四年に、「算

盤が恋を語る話」など、いくつかの短篇を書いた。野村胡堂は、報知新聞の顧問としてこの雑誌にも関係していた。乱歩の『探偵小説四十年』には、乱歩は大正十四年の秋に上京して、報知新聞社で胡堂と初対面したとあるから、涙香について言及があったのはこの時の会話ということだろう。その後、乱歩は大正十五年一月から長篇「空気男」の連載を始めている。しかし『写真報知』は廃刊になり、この連載は中絶してしまった。

乱歩は大正十三年末に勤めを辞め、専業作家となっていた。一年目の大正十四年には多くの短篇を発表している。十五年の一月に東京へと転居するが、このとき三つの連載を引き受けていた。このような、探偵小説の長篇を模索していく時期に、少年期に読んだ黒岩涙香の作品が強く意識されるようになっていったのである。

以下では、探偵作家や評論家の文章から、大正末から昭和初頭における涙香評価の転換について見ていきたいと思う。

涙香会『黒岩涙香』

黒岩涙香は、大正九年十月に没した。同年末には、涙香門下による涙香会が発足する。翌十年に追悼文集が企画され、十一年十月に扶桑社から『黒岩涙香』が刊行された。

その内容は、「先生自ら語る」「諸名士の談話」「先生と余技」「会員の見たる先生」と四つに分けられ、涙香自身の文章と、涙香に縁のあった人々の文章が約九百頁にわたって収められている。前半部の「先生自ら語る」は涙香自身の生前の文章を集めた

ものである。後半の三章は、関係者による涙香の思い出を書いた文をまとめたものになっている。

このなかで、探偵小説について触れている例外的なものが、千葉亀雄「涙香氏の翻訳小説」である。

千葉は、初めて読んだ涙香の翻訳は『海底の重罪』であったと回想する。当時の翻訳小説『英国孝子伝』『楊牙児奇獄』などにくらべ、いかに読みやすいものであったかを述べる。涙香は、人名を日本風にあらため、適切に内容をとらえながら、簡明な語彙で文章を書いていく。「だから氏の翻訳には、殆んど翻訳臭と云ふものがなく、たとえはあつても一向苦にならない、読者は海外の出来事を、さも自分の隣人のやうに考へて、楽しんで安易に作中の主人公に依頼する訳であつた」。少年時代の千葉は、続けて「人耶鬼耶」「梅花郎」「有罪無罪」といった涙香の翻訳作品を読んだ。涙香を選んだ作品の面白さ、そしてタイトルの付け方にも言及している。

こういった涙香の翻訳の姿勢は、同時代の翻訳者には見られなかった、と千葉は書く。「又た涙香氏の翻訳物が出た当時に、氏と同じ傾向の長篇小説を訳出した人びとの中には丸亭素人、水田南陽の二氏があつた。けれども二氏が遂にさうした方面の翻訳者として成功せずに、空しく水底の没人となつて了つたのは、涙香氏には別に人生観上或は芸術観上の或る透徹した一線の執着があり、他の両氏のは唯だ世間の思潮にゆらがされた一時の好奇心と云ふ差異に止まつて居るらしい」。

そして、千葉がこの文章を書いている大正期についても、「ル・キユウやスウエストルやドイル、ブレエクを始めとして、現代の

探偵小説或は神秘小説と見られるものに目につく事實は、そこには人間味が著るしく、或は全く欠けて居ることである。そこには科学や、推理や、超自然力のほけものが盛んに活躍することがあつても、生きた人間の情理が其間からまることは寧ろ稀有の事のやうに見える、そこには唯だ犯罪の興味と、犯罪をあばく興味だけの展開があるだけである。聊さか風変りに思へるモリス・ルブランさへも其の弊害からは免れてない。涙香氏はさうした乾燥無味なものには全く堪へられなかつたらしい。

このように、涙香の作品に描かれた「人間情味」に着目して、それを評価している。涙香作品の「探偵小説」としての構成については触れてはいない。「現代は相変わらず外国文化の移入の時代である。けれども氏の外国文化の移入のやうに、その文化なり芸術なりの全周を先づ遺憾なく自分のものに消化し理解し尽して、それから更に自分の創作としてそれを再現する氏のやうな光りのある移入はどれほど示されて居るであらうか。又た氏のやうな少しも危ない確実さと、簡潔鮮明さを以てする文化の移入と翻訳がどれほど認められて居るであらうか」というように、『噫無情』によつてユーゴーを、『巖窟王』によつてデュマを、それぞれ移入した業績を、千葉は評価したのである。

『黒岩涙香』に集められた多くの文章によつてかたちづくられる涙香像は、『万朝報』をはじめとする新聞によつて活躍した、ジャーナリストとしての、あるいは事業家としてのそれであった。その翻訳の業績については触れられているものの、探偵小説方面の翻訳についてはごくわずかな記述にとどまっている。多彩な趣味を持った、明治の偉大なジャーナリスト、それがここで描かれ

ている涙香の姿である。

大正期「新青年」と涙香

大正九年一月の創刊当初には農村部の若者へ向けた雑誌であった『新青年』だったが、徐々に都会的な内容へとシフトして行く。翻訳探偵小説は、その象徴的な存在になっていった。

『新青年』には、翻訳探偵小説が掲載されるほかに、評論家たちが探偵小説の紹介記事を書いていた。馬場孤蝶、井上十吉、小酒井不木といった人々である。そして『新青年』に啓蒙、触発され、日本人作家も現れるようになる。

大正十二年四月、江戸川乱歩の処女作「二銭銅貨」が掲載される。この時、随筆「探偵小説に就て」もあわせて掲載され、そこで乱歩は、涙香に触れて以下のように書いている。

日本では探偵小説がふるわないと云われていますが、あなたが左様でもないと思います。明治の新聞小説史を飾る黒岩涙香氏の探偵小説全盛時代を出发点として、最近の、博文館、金剛社、大毎、大朝等を中心とする、大正の探偵小説全盛時代に至るまで、私の狭い見聞によつても、翻訳ものではあります。随分探偵小説は出ています。

短い文章のなかで、探偵小説の状況を描いているのだが、これによつて、当時の乱歩が考えていた探偵小説の範囲が見えてくる。

ガポリオ、ボアゴベ、コリンズ其他の紹介者としての涙香小史、ドイル、フリーマン及ルルーの紹介者としての三津木春影氏、ドイル、及ルルーの紹介者としての郡山徑堂氏、ブレーク談の紹介者としての島博士、其他、森田思軒、菊池幽芳、押川春浪と翻訳者の名を数え上げるだけでも大変です。

ここで乱歩が挙げた作家は、『奇譚』でも紹介されている。『奇譚』というのは乱歩が二十代の前半に作成した手製の本である。乱歩が古書店を営んでいた時期には販売も試みられたが、買手がつくことはなく、手元に残されていた。昭和六十三年に、講談社の文庫版乱歩全集である『江戸川乱歩推理文庫』第五十九巻『奇譚／猿の言葉』で写真復刻されたものを見ることが出来る。

「我國ノ過去ニハ未ダ一人モ探偵小説家ヲ見ナイ。黒岩涙香ノ如キ本間久四郎ノ如キ三津木春影ノ如キ丸亭素人ノ如キ探偵小説ニソノ名ヲ知ラル、モノハ皆翻訳ニヨツテ居ナイモノハナイ。我國ニモ一人位ハ Poe ノ如ク Doyle ノ如ク独自のナ探偵小説家ガ出テモ悪クハナカラウト思フ。」大正五年三月節句ノ日」とある序文にはこのように書かれていた。

この本は大きく五部に分かれている。「春浪」「涙香」「ポー」「ドイル」「ヴェルヌとウエルズ」である。二百三十頁程の書物の内、約五十頁を涙香とその周辺にあてている。各章は以下のようになっている。BOOK 1 春浪及其他。BOOK 2 涙香及其他。BOOK 3 POE&OTHERS。BOOK 4 DOYLE&OTHERS。BOOK 5 VERN&WELLS。

「本書ノ配列ハ僕ガ最モ興味ヲ持ツタ事ヲ標準トスル年代順ニ

依ツタ。作者或ハ譯者ニヨツテ項ヲ分ケ、ソノ内容ニ於テモ矢張り讀ンダ年代順ニ列ベテアル。」というように、その配列は乱歩の読書傾向を反映したものになっている。ただし、後年のトリック分類などにもつながっていく、乱歩の列挙癖というようものは当時から確認でき、こういったリストが客観的であることを意識してつくられたものであることは想像できる。

この本では、冒険小説の春浪とならび、探偵小説の黒岩涙香に一章をあて、紹介している。ただ、黒岩涙香ほか、名前の挙げられていたのは、翻訳者としてであり、小説家としてではない。

大正五年の段階での、乱歩の認識はこのようなものであった。その後、『新青年』が創刊され、探偵小説が次々と紹介されるようになると、乱歩の執筆意欲も高まっていく。『新青年』はその増刊で探偵小説特集号を何度か送り出している。夏季増刊の探偵小説特集は毎年の恒例になっていった。乱歩が手にした増刊は、大正十年八月、大正十一年二月、七月の三冊で、これに刺激を受ける。そして大正十一年夏に書き上げた『二銭銅貨』は、編集長の森下雨村に送られ、翌十二年の四月に掲載されることになる。

この時期、乱歩以外にも多くの探偵作家が登場している。西田政治、横溝正史、角田喜久雄、水谷準、松本泰、甲賀三郎、葛山二郎、大下宇陀児、城昌幸、といった作家たちである。しかしまだ、これらの作家は短いものが本誌に掲載されるだけで、『新青年』増刊は翻訳を中心とし、そこに評論、随筆が入るといった構成だった。

『新青年』大正十三年八月の夏季増刊号は「探偵小説傑作集」で、ドイルなどの翻訳が並んだものである。日本人の小説はない

が、評論が多数掲載されている。その中に涙香に言及したものもいくつかあった。

木村毅「探偵小説愛読者手記」は、探偵小説をどのように読んできたかを述べている。探偵小説を軽蔑していたが、涙香の『無名氏』を手にしたことからは、愛読するようになる。

それからは貸本屋を漁つて、涙香物は大抵残らず讀んだ。

涙香物が餘り世から歓迎されるため、世をして探偵小説に飽かしめる計畫のもとに、紅葉、水蔭などが匿名で書いたものまで讀んだが、これは面白くなかつた。併し温泉場などに行く度に、その地の貸本屋にあるものを借りて来てよんだので、涙香のものなら扶桑堂から新版になつて出てゐないものまで眼を通したらうと思ふ。

自分が読むのは「人情探偵」のようなものを好むけれども、探偵小説は「人情探偵」から「科学探偵」「心理探偵」へと進んで行くのではないかと木村は推測する。だが、新聞などには情味が乏しかったり細緻すぎたりするものは向かないので、やはり「人情探偵」のほうがよいだろうともいう。「そこへ行く」と涙香はたしかに一雙眼があつた。都新聞が村井弦齋の『桜の御所』で受けた後、涙香の『死美人』か何かが載つて、大いに洛陽の紙価を高からしめたとは、中里介山氏から聞いた話だが、今の新聞経営者——少なくとも探偵小説の採択者には涙香程の人はいない。

長田幹彦「探偵小説時代」では、「私は此頃になつてこんなに探偵物の需要が多くなつた理由を考へてみる。怪奇だから面白い、

意表に出るから面白い。物凄から面白い、科学の可能性と空想とが巧みに、そして刺戟的に塩梅してあるから面白い。その面白さに依つて来たるところはいろいろあらうが、結局、私は我々の母達が涙香の『鉄仮面』や、『巖窟王』に没頭してゐた時代の心持ちとは全然違ふんぢやないかと思ふ。」このように、現在の日本人の生活は探偵小説に向かないので、むしろ怪奇小説の方に可能性を見る。

内田魯庵は明治二十二年に『無名人』を讀んで面白く思ひ、探偵小説を次々と讀んだという。しかしプロットの似たものが多く、次第に関心を失つた。

そして涙香の『海底の重罪』を讀み、その翻訳を批判している。「前半の怪奇から始まつて奇怪に終る迷宮の謎が後半の告白で一つ／＼に解けて行くという処に面白味がある。処が涙香のは前半を全く放棄して後半だけの物語を序述さしたのでから、読者を迷宮へ誘つて五里霧中に彷徨させてから次第に鍵を与へて謎を解かせるといふ面白味を全然失つてゐる。」「筋道を語るだけだから、涙香のはへたな調書を見るやうで事件が皆死んでをる。其後私は探偵小説といふものを余り讀まない。」

このように三様の評価があるが、どれもみな読みやすさ、面白さについて語っている。同時に現在では、涙香はそれぞれの意味で古くなつてゐるとも指摘している。

大正十五年

『中央公論』大正十五年二月号では、日夏耿之介が「嗜讀傳發

端」という文章を書いている。少年期からの読書歴について書いたものだが、探偵小説についても詳しく紹介している。

『少年世界』などを読んでいた時期から、次第に探偵物への興味を持つようになり、涙香に耽読するようになった。

客観的な評価としては「矢張涙香は明治的記者の先達の一人でガボリオやヒュー・コンウェイの翻案者として俗文学史の一区画に小さい名を止める人にすぎない」とも書いている。だがその一方で、「昔の探偵物は涙香はじめ丸亭素人でも南陽外史でも榎本破笠でも菊亭笑庸でも只それ興味本位の三昧境に入つて悠々と書いてあるから如何にもさもしい処がなく、もの欲しげな処がなく通俗ながら面白い」として、多くの書名を挙げてそれらを愛読したことを明かしている。

また、涙香の本が、盛んに刊行された二十年代だけではなく、三十年代、四十年代初期にも読まれていたと書かれていることも重要だろう。「古本が古本となり、又その古本となり、甲から乙、乙から丙へと転々として辛くも需要を満たして行つたのだ」。

そして『新青年』では、同じく二月に、千葉亀雄が「探偵小説と神秘小説」で涙香について触れている。中学時代に『死美人』

『劇場の犯罪』など、涙香作品を耽読し、なかでも『白衣婦人』が記憶に残るといふ。また、ガボリオやボアゴベも流行したが、特にボアゴベを好んだ。この文章では千葉の読書体験が語られているが、「楊牙児奇獄」からはじまっている。漢文で中国の探偵小説的なものにも触れた。ガボリオ、ボアゴベ以後は、ハンショール、フレッチャー、ルルーなどの名が挙がる。『新青年』を熱心に読み、多くの作家について教えられたとも書いている。そして、

欧米では探偵小説と神秘小説が愛読されていることを説き、日本では探偵小説のみが読まれていることに疑問を抱く。

『新青年』大正十五年四月号は、「翻訳創作選集」であった。江戸川乱歩「火星の運河」、小酒井不木「安死術」「秘密の相似」が掲載されている。この号はいわば、田中早苗、妹尾詔夫、延原謙という翻訳者の特集号とすることができる。三人の翻訳が、それぞれ三篇ずつ、計九篇掲載され、そのあとに各人のエッセイが掲載されている。田中「翻訳風流」、延原「わが本願」、妹尾「感情のリズム」、である。

延原は大正十年にドイルを読み直して訳したくなり、十一年以降「新青年」で翻訳して来た事を語り、「読んで面白いものを」ということをモットーとしていと述べ、

妹尾は、翻訳には「原文がよく読みこなせること、日本語がよく書けること、原文に現れた感情のリズムを生かすこと」という三つが大切だと説き、これらを備えた翻訳者は稀だと書いている。二人と同じように、翻訳の苦労と楽しみを語つてもいるが、田中早苗「翻訳風流」は、歴史的な意識ものぞかせる。

黒岩涙香といふ人は可成り多方面に興味を持った人で、探偵小説を始めとして囲碁、連珠、長唄、相撲、弄花、新聞経営、政治——大隈内閣当時は侯の高等参謀格で盛んに暗中飛躍をやつたものだ——行くとして可ならざる無しで、年中それ等の趣味に没頭してまるつきり家を顧みなかつたさうだが、他のことは彼の死と共に世間から忘失されて、今は探偵小説翻訳家としての涙香の名が残つてゐるだけだ。我等は探偵も

の、翻訳を長くやつてゐるに従つて、ますます涙香といふ人を懐かしく思ふ。彼があれだけの熱をもつてあれだけ沢山の面白い読みものを日本の読書界に紹介した功績は没すべからざるものである。同好の諸君、そのうちに涙香祭をやらうではありませんか。そのときは薄命翻訳家であつた森田思軒居士や三津木春影居士の尊霊を合祭するもよからう。なほ長谷川二葉亭、森鷗外、上田柳村なども、大衆文藝の方ではないが、翻訳功労者としてやはり祭るべきである。

様々な趣味で知られ、新聞や政治方面で活躍していた涙香は忘れられ、探偵小説の翻訳者としての涙香が残っている。これは極端な表現になっているが、『中央公論』で日夏耿之介が書いたことでもあつた。涙香の活動の中で、探偵小説が重視されるようになって来たことがわかる。

そして、書誌的なまとめとなっているのが、大正十五年六月号の「涙香曲線」という評論である。著者は土野仙八。この原稿は、大正十五年二月号の『中央公論』に掲載された日夏耿之介の「嗜讀傳發端」と、前記大正十五年四月号の田中早苗の文章を読んで書かれたものである。

「涙香曲線」では、涙香の作品を三つに分けている。一、探偵もの（幽霊塔など）二、人情もの（野の花など）三、探検もの（山と水など）という区分である。

涙香は、「塔上の犯罪」「法廷の美人」「人耶鬼耶」といった作品から、明治二十年、二十一年に探偵小説の発表をはじめた。三十四年の「幽霊塔」の後はいはばらく物語から遠ざかるが、三十八

年の「巖窟王」、三十九年の「噫無情」「人の妻」などの大作が続く。こういった涙香作品の変化を「曲線」と表現して、それをたどっていく。そして、涙香がもとにした原書を挙げ、さらに日夏の挙げていたリストを補つた。

『探偵趣味』涙香特集

探偵作家たちの評論・随筆を中心とした雑誌『探偵趣味』は、大正十四年に、当時大阪在住であつた江戸川乱歩と、大阪毎日新聞の記者だつた星野龍猪（春日野緑）が始めた同人雑誌だが、多くの探偵作家たちを同人としていた。創刊当初、編集は交代制で、一号を江戸川乱歩、二号を春日野緑が担当し、以下、三号小酒井不木、四号西田政治、五号甲賀三郎、六号村島帰之、七号延原謙、八号巨勢洵一郎、九号牧逸馬と続いた。最初の発行元は、大阪のサンデー・ニュース社であつた。大正十五年十月号からは、発行元を東京の春陽堂に変え、小酒井不木・甲賀三郎・江戸川乱歩の三名を監修とし、水谷準が実際の編集を担うことになる。

『探偵趣味』の大正十五年十一月号は、黒岩涙香特集であつた。この「涙香追憶号」特集では、「涙香随筆」として以下の文章が寄せられている。千葉亀雄「涙香随想」、黒岩漁郎「おもひで」、土野仙八「涙香余滴」、平林初之輔「黒岩涙香のこと」、羽志主水「涙香の思出」、日夏耿之介「天人論」の著者、田中早苗「人間涙香」、宇野浩一「涙香について」。

黒岩漁郎（黒岩日出雄）は、涙香の息子で、涙香の思い出について書いている。他は田中早苗「人間涙香」が、涙香の作家以外

の面にあえて注目していることをのぞくと、ほとんどが翻訳活動を評価した文章である。涙香には「無慘」という創作もあるのだが、これに触れているのは土野仙八だけで、それも梗概を述べているにすぎなかった。まだ「無慘」を、日本探偵小説の初期の重要作として扱うようにはなっていなかったのである。

千葉亀雄の「涙香随想」という文章では、「探偵小説の開祖」「探偵小説の元祖」というような言葉が出てもある。八節ある文章の「六」の部分で、

氏がコンエイの「法廷の美人」を訳述したのは、明治二十年だといふことであるが、二十三年頃には、已に一千部以上の英文小説を読んだと云つて居たさうだ。実によく努めたものと思はれるが、話で聞けば、氏についての当時の探偵小説反訳家であつた水田南陽氏や、丸亭素人氏すらも、或は原書を氏に仰ぎ或は氏の教誨を得て始めてそれに着手したといふのだから、やはり探偵小説の開祖たる光榮は、どうしても氏の頭上に置かれねばならぬことになる。

と、単に個人としての訳業だけでなく、他の翻訳家にも影響を与えたことを述べている。そして『萬朝報』の性格を見れば明らかにように、他人の罪悪を暴露することの興味を、涙香の特質とした。「また従つて、さうした涙香小史の反訳が、後年のやうな家庭小説のそれよりも、探偵小説において唯一の光彩を發揮し、世人をして氏をどこまでも探偵小説の元祖として、記憶させるやうになつたのも怪しむに足るまい」と、その暴露への興味を、探偵

小説でも發揮されているのであるとした。

それ以外の文章では、たとえば延原謙は、涙香が翻訳に使用した書き込みのある本を入手し、それを紹介している。そこから涙香の翻訳の特徴である「短く切りつめた文章」の効果について言及する。

平林初之輔は、ジャーナリスト、政論家、思想家としての側面にも触れつつ、涙香の翻訳業の功績を語る。「明治文学史上、彼は彼の翻訳に見る一種の立体的な、説得力に富んだ文体を創造したスタイリストとして記憶されねばなるまい」と、ここでも涙香の文体が注目される。加えて「それと同時にガポリオ、ボアゴベー等の如き有名な探偵小説作家の作品を紹介し、近代的探偵小説を日本の文壇に移植した点で特筆大書する価値が十分にある」と書いた。

その他、羽志主水や日夏耿之介も涙香の文体について触れている。宇野浩二も「大体僕の涙香氏に一番感心してゐるのは、あの文章である」というように、文体について語っているのだ。

以上見ただけでもわかるように、『探偵趣味』は探偵小説愛好家の雑誌であるにもかかわらず、涙香作品の内容に踏み込んだ記述は少なく、ほとんどがその特色のある文体について語つたものになっている。

このように、『中央公論』『新青年』『探偵趣味』と、大正十五年は涙香が回顧される年となつたのだが、しかし、探偵小説として事件がどのように描かれるのかといった、物語についての記述は少なかった。

「明治の探偵小説及び大衆物」

小酒井不木は、昭和四年四月に三十九歳の若さで亡くなるので、昭和二年は旺盛な執筆活動の最後の時期に当たる。以下では、昭和二年五月の「日本文学講座」（新潮社）第五卷に載せられた、「明治の探偵小説及び大衆物」を検討する。この文章は、日本近代の探偵小説史について書かれた不木の文章の中で、もっともまとまったもの（全集によると二十字×十行換算で約九十六枚）とすることができると言える。

『犯罪文学研究』をはじめとする、これまでの不木の評論は、主に近世の文学と、西洋の探偵小説、そして科学的な知識や現実の犯罪について書かれたものであった。⑤それらの蓄積を背景にして、この文章で明治期の探偵小説について詳しく論じることになったのである。

この頃いくつかあった「講座」の性質と役割について簡単に述べておくと、大正末期、関東大震災の後になって、明治期の文学がはっきりと歴史として認識され、記述されていくようになっていったのであった。そういう「文学」カテゴリーの中に、「探偵小説」という項目が立てられたことの意義も大きいだろう。

「明治の探偵小説及び大衆物」で、不木は探偵小説を「一つの犯罪が行はれて、その犯人の知れぬとき、それが探偵によってだんだん捜索され、遂に犯人が見つかるに至る経路を述べた小説をいふ」というように定義している。そして、高山樗牛、島村抱月の探偵小説への批判的な意見を紹介し、これに反論していく。基

本的には、当時の探偵小説に俗悪なものが多かったことは認めつつ、いくつかの要素において、評価すべきところもあると指摘している。

不木が目にするのは、明治の探偵小説には「索究的快樂」のほかに、嫌疑をかけられた無実の者の疑いを晴らす、いわば「雪冤的興味」が存在するということである。さらに「犯罪に対する興味」についても述べている。このような古くからある「雪冤的興味」「犯罪に対する興味」をも含みながら、「索究的興味」を中心とした探偵小説を提供したのだとして、不木が評価したのが、黒岩涙香なのである。

不木は、「雪冤的興味」「犯罪に対する興味」という点では、すでに元禄時代から「比事物」というジャンルが存在していたことを指摘する。そして「大岡政談」ほか、このような近世の読み物が、明治に入ってから書かれた仮名垣魯文や須藤南翠らの実録ものと並んで、明治十年代にも一般に読まれていたことについて触れる。

つづいて不木は、涙香の業績について記述していく。明治二十一年「法廷の美人」から始まる涙香の翻訳探偵小説は、読者を喜ばすことのみを考え、原作小説に大胆な加工をしながら作られたものだった。不木はここで涙香の翻訳に対する姿勢を詳しく紹介し、そしてその作品が他の作家・翻訳者たちにいかに影響を与えたかについても述べている。

しかし、涙香の役割については評価しつつも、その作品には必ずしも肯定的評価を与えてはいないことは、「涙香が如何に大衆に媚びようとしたかは「人耶鬼耶」の序文を見ればわかる」とい

うような書き方をしているところからわかるだろう。

涙香の時代には、純粹な翻訳探偵小説は歓迎されなかった。森田思軒や内田魯庵、森鷗外などが翻訳をおこなったが、広く読まれるにはいたらなかった。明治四十年前後に、ホームズものが英語の教科書として使用されるようになり、次第に翻訳探偵小説への機運があらわれた、と不木はいう。そして大正期には、涙香の小説のような長篇ではなく、短篇探偵小説が流行するようになっていった。

不木は、探偵小説は「低級」の域から脱したとし、今後については、長篇でも以前の涙香のような人心をとらえるような作品があらわれるべきであるとした。

この「明治の探偵小説及び大衆物」で、不木が『犯罪文学研究』などで分析・紹介をおこなった近世の文学と、明治期から大正・昭和へと続く探偵小説が、ひとつの流れとして記述されたことになる。

そしてその中で、黒岩涙香を重要な作家として取り上げたことにも注目すべきだろう。この文章のなかで、不木は涙香を、単に人気のある作家としてではなく、探偵小説に「雪冤的興味」「犯罪に対する興味」「索究的興味」を合わせた作家としても評価している。さらに、昭和に於いて涙香的な意味をもつ作家・作品がふたたびあらわれるべきであるという展望も述べている。

乱歩と不木、涙香をめぐる

不木のこういった涙香評価の姿勢は、江戸川乱歩をはじめとす

る同時代の探偵作家とのやりとりの中であらわれたものである。

江戸川乱歩と小酒井不木の書簡を取めた『子不語の夢』を見ると、乱歩から不木にあてた大正十四年八月二十六日の書簡に、探偵小説の芸術性をめぐって、「ルパン式のもの書き度い位ですから決して「芸術」にこだはつてゐる訳ではありません。一生に一つでい、から「巖窟王」の様な通俗的大作がしたいものだと思望して居ります」と書かれています。

昭和四年の「蜘蛛男」が「涙香とルブランを混ぜ合せたようなものを狙つて書き始めた」ということは比較的よく知られているが、そのような長篇への意識がすでに大正十四年の段階であったことが確認できる。

同時期の文章では、たとえば乱歩は、『新青年』昭和三年十一月号の「最近の感想」で、「一年ばかり前から、我々の間に、涙香に帰れという様な声が起つている」と書いている²⁷。

無論長篇物についてであるが、僕もその声を発した一人である。思うにこれは、読者側には関係なく作者側から当然のなり行きとして起つて来た考に相違ないのだが、先にも云つた短篇小説がある限度以上発展し難い所から、作者達、殊に流行の作者達が、一つの逃げ場として長篇物に着眼し、長篇物と云えば、涙香だな、涙香はうまかつたなと、今更らの様に回顧的になつた訳である。我々は嘗つて涙香なんか読み尽した上で、ポー——ドイル的な短篇推理物に心酔したのであるからこの現象はややアベコベの観がないこともないが、それ丈け涙香の通俗味が偉大であつたことにもなるし、又一つ

には大衆鬻物小説が横行し探偵小説もその一部分の如く取扱われ、小説依頼者の頭も、作者の頭も、やや混乱を来し、無意識ながら鬻物の大まかな組立てに近づく心持が生じ、そこで、涙香と来た訳でもあろうかと考える。

このように、探偵小説の長篇化にともなうて、涙香が意識され出したことが明かされる。乱歩や小酒井不木だけでなく、横溝正史や甲賀三郎にも、そういう傾向が出てきたことを見ているのだった。

横溝君と一緒に小酒井氏を訪ねた時（去年の秋だったが）同氏の書齋に古い版の涙香本が山と積まれているのを見たことがある。それと同時に、横溝君が貸本屋を獵つて、涙香物蒐集をやっていると聞いた。甲賀三郎君は、年来探偵物通俗論者であつて、一年ばかり前、僕が『やっぱり涙香に行くべきかなあ。』と云つたのに対し、『僕は昔からそう思っている。』と多分そんな風に応じた位である。小酒井氏の長篇物の題が、涙香味を帯びて来た。（一例展望塔上の死美人）甲賀君にもそんな傾向が見えた。（一例深夜の貴婦人）殊に甲賀君の「深夜の貴婦人」の如きは、ある部分の文章が巧みに涙香小史そっくりで、『やっているな』とほえましくなつたことを覚えてゐる。『新青年』に一度に掲載された翻訳「二輪馬車の秘密」が、二世涙香を企てた一つの試みであつたことは、誰れしも気づいてゐると思うが、文章の似せ方は実にうまいものであつた。だが僕の思うのに、涙香の第一の魅

力は、文章の特異性よりは、筋の運び方の一種甘味のある論理的な点ではなかつたか。一つの事柄を語るのに普通の直截な云い方をしないで、態と持つて廻つて、それが又とても甘味のある持つて廻り方なのだが、よく学者の使う迂回的な説き方に似ていた。無駄が一つもなく、どんな小さな事でも凡て筋ばかりでいて、しかも文章は長くなるのである。その妙に必然的な説話法が誠に探偵小説的であつたと思うのだ。涙香物がある意味で原作より面白い場合があるのは、一にこの説話法にあつたのではなからうか。

この文章の末尾で、乱歩は甲賀三郎の書いた探偵小説論に言及している。これは「探偵小説はどうなつたか」のことで、『新青年』昭和三年八月増刊号に掲載されたものである。

この号は、休筆していた乱歩の復帰作「陰獣」の第一回が掲載される号でもあつたが、甲賀の論は乱歩の休筆を前提としてゐるので、乱歩の沈黙と、森下雨村の編集傾向を探偵小説不振の原因として挙げている。この頃基準と考えられていた二十枚という探偵小説の短さを問題として、五十枚、百枚と言つた作品で、大衆に読みやすいものを書いていくべきではないのか、というのが甲賀の主張であつた。

これについて乱歩は「大体に於て賛成だ」とし、「探偵小説の大衆的進出ということ、短篇行詰りの打開策でもあり、威勢のいいことでもあり、「涙香に帰れ」と相関聯して、これからの仕事に相違ない」というように述べてゐる。

つまり、探偵小説の長篇化の戦略としての涙香再評価なので

あった。

この「最近の感想」が収められた乱歩の随筆集『悪人志願』は、昭和四年六月に博文館から刊行された。乱歩にとつては、小説以外では初の単行本になる。大正十二年から昭和四年までに発表された乱歩の文章で、小説以外のものを集めたものである。この本はAからFまで六つの章に分かれていて「Aは主として自己身辺に関するもの、Bは恐怖その他の趣味に関するもの、Cは探偵小説及大衆芸雑感、Dは私自身の小説及他人の作品に対する感想類、Eは劇と映画」となっている。

そして最終章であるFが「小酒井不木の思出」にあてられる。

ここに、「小酒井不木氏のこと」「小酒井氏の訃報に接して」「探偵作家としての小酒井不木氏」「脇掛椅子の凭り心地」「ラムール」の五つの文章が収められている。不木が亡くなってまもなくの刊行であり、乱歩に多大な影響を及ぼした人物であったために、このようなかたちで最終章をあてることになったのだろう。「ラムール」というのは合作掌編小説で、前半を乱歩が、後半を不木が書いたものである。

「探偵作家としての小酒井不木氏」(初出「大阪朝日新聞」昭和四年四月五日)では、「日本の探偵小説は、出発点から独りよがりな、狭い趣味を狙った傾きがあつて、これを婦人子供にも面白がつて読まれる様な、いわゆる大衆的なものに引直すことは、仲々困難であつた。我々の仲間は、それについて随分頭を悩ましたといえる。少くとも黒岩涙香の翻案小説が流布している程度に、というのが我々の考えであつた。涙香が我々の話題に上る様になつた。小酒井氏も早くからその点に着眼され、古本屋に命じて

涙香の全作品を蒐集されたこともあつた位である。」と、涙香作品のように読まれる探偵小説が目標とされたことを書いている。

そして「小酒井氏の作品に「涙香」がやや具体的に現われて来たのは、昭和二年末のことで、その適例は「大雷雨夜の殺人」「展望塔上の死美人」等であつて、この表題の涙香味を以つても、同氏の心持を推察することが出来たのである。」というように、不木の小説作品にも涙香を意識している様子を読み取っている。

その後の涙香評価

このようにして、大正十五年・昭和二年の時期に、江戸川乱歩・小酒井不木を中心とした探偵作家たちによって、黒岩涙香の、日本探偵小説の始祖としての位置づけが強化されたのであつた。涙香晩年から大正の中ごろまでの、新聞人としての評価から、この時期をさかいにして、探偵小説の方面での評価に重心が置かれるようになるのである。

この時期以降になると、先に見たような小酒井不木「明治の探偵小説及び大衆物」(昭和二年)だけでなく、多くの探偵小説史記述で、涙香の業績が挙げられる。たとえば「日本文学講座」(改造社・昭和八年)の水谷準「探偵小説研究」で、水谷は、神田孝平の「和蘭美政録」に触れるものの、「併し、これは歴史的な価値だけのことで、矢張り探偵小説の概念が一般に消化されたのは黒岩涙香が新聞の小説欄を利用して、海外の作品を片端から翻案して掲載したからであろう」と書く⁸⁾。日本の探偵小説史の起点は江戸川乱歩に置くが、その前史として涙香の業績があつたことを

高く評価している。

さらに、昭和十二年には、柳田泉によって、涙香の創作探偵小説「無惨」が、初の日本探偵小説として評価されることになる。

『探偵春秋』に連載の「随筆探偵小説史稿」の第二回、「四、涙香の創作探偵小説『無惨』について」でこの小説を紹介する。「吾等は、翻訳家涙香の外に、作家涙香の名も記憶に値することを知らなくてはならぬ」と書く。こうして涙香の『無惨』にも光が当たることになるのだった。

注

- (1) 伊藤秀雄『明治の探偵小説』（晶文社、昭和六十一年）
同『黒岩涙香』（桃源社、昭和四十六年）
同『大正の探偵小説』（三二書房、平成三年）
- (2) 江戸川乱歩『探偵小説四十年』（桃源社、昭和三十六年）
- (3) 涙香会『黒岩涙香』（扶桑社、大正十一年）
- (4) 江戸川乱歩『奇譚／猿の言葉』（講談社、昭和六十三年）
- (5) 『日本文学講座 第五卷』（新潮社、昭和二年）
- (6) 小酒井不木『犯罪文学研究』（春陽堂、大正十五年）
- (7) 江戸川乱歩『最近の感想』（『新青年』昭和三年十一月）
のち、『悪人志願』（博文館、昭和四年）に収録
- (8) 『日本文学講座 第十四卷』（改造社、昭和八年）
- (9) 柳田泉『随筆探偵小説史稿』第二回（『探偵春秋』昭和十二年一月）

（おちあいたかゆき 江戸川乱歩記念大衆文化研究センター学術調査員）